わが社の歴史

電子計測技術を通して広く社会に貢献する日本マイクロニクスの歴史

株式会社日本マイクロニクス（代表取締役社長　長谷川正義）は、電子機器のメンテナンス事業からスタートし、IT 産業の発展と共に、半導体関連および FPD 関連分野において検査・測定機器の開発・製造・販売をしてきました。創業以来一貫して電子計測技術を通して広く社会に貢献するため、挑戦をし続けているわが社の歴史をご紹介いたします。

【創業】

1970年、現在相談役名誉会長である長谷川義榮が東京都目黒区に、日本マイクロニクスの前身、「トーワ電気株式会社」を設立いたしました。仲間３名で始めた会社は、長谷川の妻の実家の車庫を改造した作業場と、事務所代わりの６畳間一室。その名の通り、ガレージカンパニーからのスタートでした。当初は事業として、シンクロスコープ、ファクシミリ、産業半導体･真空試験装置のメンテナンスを行っておりました。

設立当時の開発風景

1971年に本社を東京都武蔵野市に移してからは、半導体を対象とした計測技術、および微細加工技術の研究開発を進め､1975年には半導体検査装置､及び精密測定機器の開発･販売を開始、社名を現在の「株式会社日本マイクロニクス」に変更しました。翌年にはプローブカードの開発に成功、同事業は現在の当社の中核事業に成長しております。

当時のプローブカードの主流は、カンチレバー型と呼ばれる製品で、社員が顕微鏡を覗きながらプローブと呼ばれる針を、１ピンずつ基板にピンセットで配置していくという、いわゆる労働集約型の製品でした。職人による匠の技ともいえる技術で完成したプローブカードは、見事な針の配置､配線の精度も相まって､見た目にも大変芸術的でした。

【事業拡大】

新平賀工場（現 青森工場）

“顧客に最高のベネフィットを提供する。”という長谷川の熱意が込められた製品は、お客様にも認められ、売上は順調に伸びていきました。1981年には、長谷川の出身地である青森県平賀町（現　平川市）に平賀工場を設立。その頃には、社員数が100名以上となっていました。現在でも青森県平川市には、青森工場と青森松崎工場の２つの工場があり、当社の主力工場としてプローブカード等の開発・製造を行っております。

業界初 LCD オープン・ショートテスタ

その後、大分工場と熊本工場を設立し、シリコンアイランドと呼ばれる九州地区に進出いたしました。また、同じ時期に、液晶ディスプレイ検査装置１号機を完成させ、FPD 業界にも参入を果たし、以後プローブカード事業と装置事業を２本柱として、現在の規模まで事業を拡大させてきました。

1997年には、日本証券業協会の店頭登録銘柄（現JASDAQ）として株式公開企業となり、株式公開によって調達した資金で、FPD 検査装置の生産拠点となる青森松崎工場を設立。大分工場と熊本工場を現在の場所に移転して増産体制を築き、米国にもサンノゼ支店を開設し、社員数も700名を超えるまでになりました。

尚、当社の株式は2010年から JASDAQ-TOP20銘柄に選定されております。今後も JASDAQ を代表する銘柄の一つとして努力して行きます。

【海外進出】

1990年代までの当社は、米国のサンノゼ支店やドイツ、シンガポール等の販売代理店によって海外市場へのアプローチを行っておりました。2000年代に入ると、中国市場が著しい成長を見せるようになり、当社も中国市場への積極展開に向けて2003年１月、中国上海市にプローブカードの生産拠点として、旺傑芯微電子（上海）有限公司（MMS）を設立しました。

初めての海外現地法人で苦労はあったものの、現地社員の教育期間を経て、７月には中国政府関係各位、取引先各位、日本・台湾からの関係者等を含め、総勢120名余りのご列席のもと、盛大に開業式典を行うことが出来ました。以来、MMS では中国半導体産業の発展に寄与すべく、全社を挙げて事業に取り組んでおります。

子会社 MMS（中国上海市）

MMS 設立以後は、韓国と台湾に生産拠点を設立、中国、米国及びドイツにはセールスおよびサービス拠点として子会社を設立し、本格的に海外展開を進めてきました。

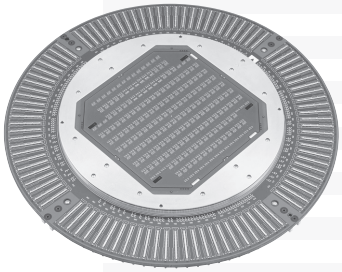
特に、アジア戦略の一環として韓国京畿道富川市に設立した MEK では、これまですべて日本で生産し、世界に輸出していた当社の主力製品であるアドバンストプローブカード「U-Probe」の生産を行い、最先端半導体関連企業の進出が相次ぐ韓国市場での体制を強化いたしました。2012年には、韓国忠清南道牙山市に MEK の新工場を設立、同社は当社グループの収益に貢献しております。

子会社 MEK Co., Ltd.
（韓国京機道富川市）

【世界初】

2000年代初め半導体業界では、検査効率化の切り札としてウェーハ一括測定に熱い視線が注がれておりました。その実現のため、当社でも長年開発を進めていましたが、遂に2005年に世界初の８インチ及び12インチウェーハ一括測定検査を、アドバンストプローブカード「U-Probe」で製品化することに成功しました。

セラミック薄膜多層配線基板の製造技術を開発に導入できたことが成功要因のひとつであり、この技術は当時の世界最速のスーパーコンピュータにも実際に使用され、その性能と信頼性は抜群に高いものでした。セラミック薄膜多層配線基板は、薄膜多層配線の高い信号伝送能力（高速・高密度・高品質）と、セラミックの高耐熱・高信頼性を兼ね備えたコア技術として「U-Probe」を新たなステージに導きました。


業界初、8インチ一括測定可能次世代カード「U-Probe」

発売開始当初、「U-Probe」は、フラッシュメモリー向けの製品でした。携帯型音楽プレーヤーやデジタルカメラ等の普及により、記憶媒体としてのフラッシュメモリーの需要が増加し、「U-Probe」の需要も増えて行きました。その後、DRAM 向け製品へ展開することにも成功し、お客様から高い評価をいただき、工場は常にフル稼働の状況になりました。

そこで2007年５月、青森工場の隣地に「U-Probe」生産のための新棟を増築いたしました。生産ラインを止めることが出来ないくらいの受注があったため、製品を作りながらの設備移設となり、社員がゴールデンウィーク返上で導入した設備は６月から稼動、順調に量産ベースに乗せるこ

青森工場新棟

とが出来、開発型企業として地道に積み上げてきた技術力と社員の努力が、大きな実を結ぶ結果となりました。

【当社の技術力と開発力の源】

国内外に拠点が増え、社員数が1,000名を超えても、当社では創業当時の熱い思いが、マイクロニクスの良き伝統として受け継がれています。それは、社員なら誰でも知っている当社の行動指針のおかげです。

1．原理原則を大切にする。
2．「観･感･勘」を大事にし、自己の能力開発を追及する。
3．達成への５つのステップ「夢（needs）」「想定」「創意」「熱意」「実行」を確実に踏んでいく。

この行動指針が全社員に徹底されていることが、当社の強みである技術力と開発力の源だと考えています。

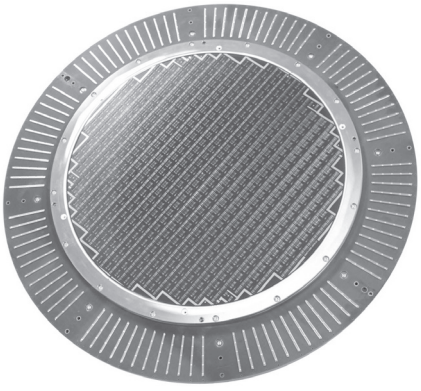
行動指針「原理原則」

【新経営体制】

2007年４月に長谷川義榮は社長から会長（現在は相談役名誉会長）に就任。当時副社長だった長谷川正義が２代目の社長となり、新たな経営体制がスタートしました。

新体制においても、これまで以上に製品の安定生産と効率化、受注・販売・サービス活動のグローバル化等を推し進め、また新技術や新製品の開発にも精力的に取り組み、その結果、2008年９月期には、売上高400億円を超えること

「Model PW-8000」パワーデバイス測定用オートプローバ



「U-Probe」300mm ウェーハー括測定対応カード

が出来ました。

その後2008年末にはリーマンショックを契機とした世界金融危機が発生、2011年には東日本大震災やタイの洪水等、事業に大きな影響を与える出来事が起こる等、日本のエレクトロニクス業界は、厳しい事業環境ではありますが、当社は社長の指揮のもと全社員一丸となって事業に取り組んでおります。

当社は、2010年に創立40周年を迎えました。社名にも取り込んだマイクロエレクトロニクス技術に一層の磨きをかけ、業容拡大に努めております。これも一重に関係者の皆様の温かいご支援の賜物と心から感謝申し上げます。

現在、当社グループは、当社並びに海外子会社８社、国内子会社１社で構成されており、社員数も1,000名を超える規模になりました。

これからも日本マイクロニクスは「電子計測技術を通して広く社会に貢献する」という経営理念のもと、お客様の「needs」を叶えるために、当社の強みである技術力と開発力を活かし、さらに進化し、発展し続けて行きたいと思います。